

を提起して来た ELIAS 博士や同傾向の問題を本春石油地質学会年会席上報告した Utah の RIGBY 博士等の研究も重要である。併し、ここしばらくは主流として、正統派記載古生物学が続きそうである。

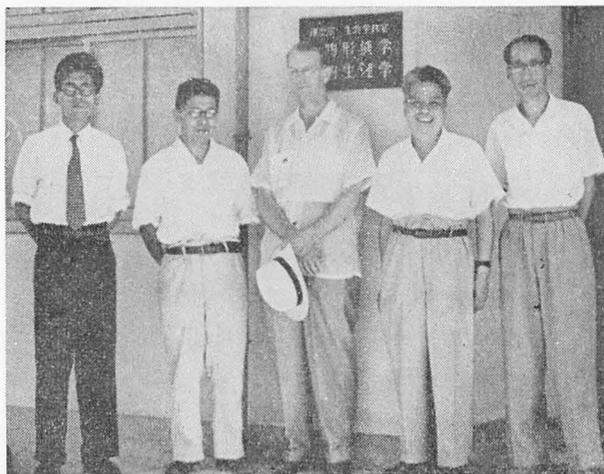
化石石灰藻の資料は、未だにそれ程不足且つ断片化しているといえるのかも知れない。  
(東大理学部地質学教室・米国コロラド大学留学中)

## ヘンメリング博士の玉野岡大 臨海実験所来訪報告

猪野俊平

ドイツの Max Planck 海洋生物研究所の HÄMMERLING 博士は、その一門の K. L. SCHÜLZE, G. WERZ, H. STICH および K. BETH の諸博士らと共に、欧州産のカサノリ属の *Acetabularia mediterranea* および *A. crenulata* などを材料にして仁物質、核物質の究明から、また体に隔壁のないこの属植物の特性をうまく利用して核細胞質の異種のものへの流し込み移し換えといった器用な実験発生学的研究をされ細胞質内のエネルギー物質の解明などで発生学や細胞遺伝学の方面に多大な貢献をされている一流の学者であるが、今秋、東京で開催される国際遺伝学シンポジウムの学会から招へいされたのを機会に、東洋のカサノリ属を採集する計画をされ、琉球で *A. ryukyuensis* カサノリ外1種を、折柄、琉球大学におられた瀬川宗吉氏らの御世話でうまく適期のものを採集され、那覇から7月18日夜半に岩国へ飛行機でつかれ、19日午後岡山駅へつかれた。ヘンメリング博士は香港で買われたとかいうナイロンシャツの夏姿で、肩に沖縄採集のカサノリの入ったナイロン鞆を大切に持たれ、自動車の乗り降りにも一切肩からはずされないといつた慎重振りで実験材料を大切にされる心構えには全く感服した。材料はポリエチレン製の割れない瓶(我国にもあるが、蓋のねじの工合などはさすが独乙製と思つた)に入れ、この瓶の一杯つまつたナイロン鞆には氷を入れて温度の上昇を防いでおられた。

7月21日の干潮時に、岡大臨海実験所の採集船大泡丸が園の州へ川口四郎所長はじめ、ちょうど来所されていた阪大神谷宣郎教授の門下生らと共に



岡山大学生物学教室へ来訪の際の HÄMMERLING 博士 (中央, 左から中原清士, 川口四郎, ヘンメリング, 猪野俊平, 木村勘二, 博士は岡山が暑いといつて, 常に写真のような涼しそうなシャツを着用された。

に行き *A. calyculus* ホソエガサの 1000 個体以上を採集し, 適期のもの 300 個ばかりを選ばれ大満悦であつた。ホソエガサの大群落を見られた時は, 夢に見た材料だと生物学者ならでは味わえぬ感覚にひたつておられた。それから 7 月 31 日まで 2 週間も滞在されて, ゆつくりと材料を処理され, 琉球のものも, 玉野の材料も飛行小包でドイツの研究所へ送られた。それも 1/3 ぐらいずつに材料を分けて送り本国から “good” の電報が届かないと安心されないといつた用意周到さであつた。一部の材料は避暑地の軽井沢まで持参されたが, 8 月 1 日の一晚は岡大の宿舍では材料に “too hot” といわれ, 2 時間毎の氷の入れ換えで, 一晚中扇風機のかけつばなしといつた具合なので, 8 月 2 日の夜はヘンメリング先生自身のためでなく, カサノリのために岡山一番のエア・コンディション付の岡山ホテルへ宿泊され, 8 月 3 日岡山を立たれた。ちなみにヘンメリング博士は, 種々の培養ガラス器具, ポリエチレン器具や旅行用ラベルなど寄贈して行かれたが, 海藻培養学者には参考になる点が多々あると思われるので興味をもたれる方は, 玉野市渋川の岡大臨海実験所常勤の大羽助教授へ問い合わせされたい。(岡山大学理学部生物学教室)

ヘンメリング先生の住所 Prof. Dr. JOACHIM HÄMMERLING Max Planck-Institut für Meeresbiologie 23. Wilhelmshaven Anton-Dohrn-Weg